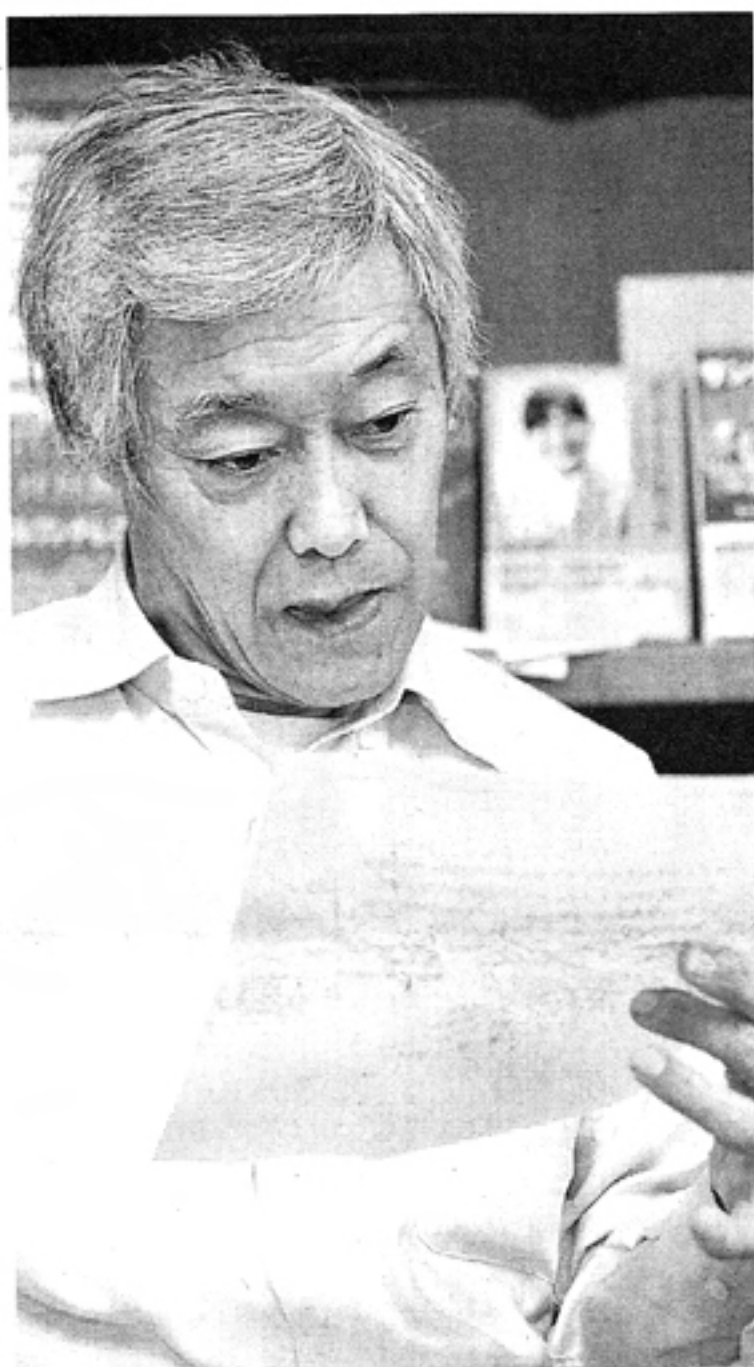


しら い たか ゆき
白井 隆之さん(67)



未熟児で生まれ脳性小児まひを患い、四肢と首、言語に障がいが残った。「格好良くしたいのに」走ればビリ。運動会には参加したくなかった。小学4、5年生になり、そ

うて「出版社経営を志望。小説が好きで大学では文芸部に入った。「作家の才能がないのに気がつ

いて」ある。5年ほど前には、「障がい者は来なくていい」「余計なことはしないで」と言われたことも

ある。5年ほど前には、

んな弱気が変わった。ビリでも拍手で励ましてくれる仲間、完走を心から喜んでくれる両親の存在を感じられるようになった。「これでいいんだ。

卒業後の約2年半は、書店と印刷会社に勤務して仕事を覚えた。念願かなって東京都内に創業後、リュックサクに見本を詰め、全国を営業して回った。ただたどしい言葉遣いと不自由な動きを見た相手から、

収益の柱となった副読本の類似本を同業大手に発売され、売り上げが約3分の1に減った。それでも「自分の知らない世界で、生き生きと活動している人たちのメッセージを伝えられる。こんな面白い仕事はない」と、動けなくなるまで続けるつもりだ。

神奈川県生まれ。関東学院大経済学部卒。1972年、大学同窓会「燦葉会」の名前をとって燦葉出版社を創業。

昨年刊行点数が400冊を超えた。近く403冊目となる「日本が世界を救う——核をなくすベストシナリオ」(ステイブン・リーパー著)を発売する。「リーパーさんは核兵器をなくすアイデアを持っている。このメッセージを広げたい」

文と写真・吉富裕倫